「漁村×学シンポジウム」に想う

豊田留也さんが企画した漁村×学シンポジウムが8月26日(土)2時から漁村センターにて開催され、大学生から80代の方迄の115人が集まりました。川窪先生(大手前大学)の基調講演で「漁村×学」という今回のシンポジウム立ち上げ迄の経緯や意味についての話しではじまり、豊田さんの恩師である竹田先生(早稲田大学)のご挨拶は哲学、哲学と漁村の関連ってあるの？そして哲学って固苦しくて難しい学問…という思い込みがありましたが、物事の見方、考え方、人との関わり方などについてとても身近に感じられました。絶対に正しい世界像はない。哲学とは多様な人達同志が対話する中で納得できる様々な世界像が身につき これが教養をひろめる…という言葉がすごく印象に残りました。簡単によい答が出にくいものだからこそおもしろい学問なんだろうか…。学ぶこと学問することの興味と意欲の扉が少し開かれたようにさえ感じました。

下田先生(大阪大学)は建築学の立場からたくさんの映像を通して、先人達の知恵、特に九鬼については、石組みや石階段は全国に類をみない程の素晴らしさであると、又漁業を主な生業(なりわい)とする九鬼をどう残していくかという課題にもふれられ、大切なのはコミュニケーション力、狭い空間の中で信頼し合う町の人達の生活が大切と…。

後半のトークセッションもとてもおもしろく、会場からも質問や感想など活発な発言に先生方が答えられ、宮崎先生(関西大学)は効率を求めるのではなく、様々なものが混ざり合った中で何より一次産業を盛り上げていかなくてはいけないとのお話しがあり、更に竹田先生は人口が減少しても生活の質を上げることは出来る。

九鬼町は面白いということを発信できれば来る人も増え、交流も生まれる。出会いの場所をうまく作れたら九鬼は生き残れるのではないか、と心強い嬉しいお話しもあり、考え方、やり方はいろいろあるんだ、希望が持てるんだと思いました。ご講演下さった先生方、参加された皆様方の熱気もさめやらぬ午後5時すぎ、シンポジウムは幕をとじました。

学ぶ…という観点から学生時代に戻ったように思った。もっと固い会だと思ったがとてもおもしろかった。今回の話をきいて九鬼での生活が楽しんだった。何か起こせそうだと感じた。是非これからも、続けてほしいなどなどの声が多くきかれました。

豊田さんに網干場スタッフのSさんは「留せくん、君の役割りは若い人をこの町に呼んでくることやで！」と常々言っているのをきいていましたが、ここ4、5日は町に若者が溢れていました。そんな光景に地元の人は「とても嬉しい、若がえった気がしてついつい話しかけたくなった」と目を細めていました。移住、定住に結びつくには時間がかかると思いますが、九鬼の未来に一筋の光が差しこんだ様に思いました。

このシンポジウムにご協力下さった先生方、スタッフの方々に感謝申し上げたいです。

そして、これだけのシンポジウムの開催にあたり、九鬼に来る前の縁と来てからの縁をつないで下さって準備に奔走された地域おこし協力隊の豊田留也さんに心からの敬意をこめてお礼を申し上げたいと思います。